Toyo University



FACULTY DEVELOPMENT

Contents

国際化と東洋大学のFD活動 p.1
平成23年度 一般教員FD研修会 p.2
第4回授業改善事例シンポジウム p.3
平成23年度 学部FD活動状況報告会 pp.4-5
平成23年度 公開授業 p.5
刊行物p.6
各学部・研究科におけるFD活動pp.6-9
学生FD活動・他大学との交流 p.10
学外FD関連研修会参加レポート
FD推進委員会 活動状況報告・活動計画 p.12

国際化と東洋大学のFD活動

副学長(国際化推進担当・国際地域学部教授) 北脇 秀敏

世の中の動きはめまぐるしいが、ある変化が社会に完全に定着し、人々の行動が根本的に変わるには一世代かかるのではないだろうか。例えばパーソナルコンピューターは1970年代に登場し、いまでは家電製品となっている。今では情報伝達の手段として欠かせないインターネットも、1989年に冷戦が終わって世界に公開されるまではアメリカ



の軍事機密であった。それから20年以上を経てインターネットの普及が情報の流れを大きく変えた。またそれを支えるコミュニケーションツールとしての英語が事実上の世界語になった。

東洋大学では一部の研究科・学部で2004年より英語のみで大学院の修了が可能になり、2009年からは英語により学部の専門科目も講義されている。すでに一世代前に国際化しているASEANの多くの国や南アジアにおいてそうであるように、将来は日本でもトップクラスの大学では一部の分野を除いて将来専門科目の多くが英語で教えられるようになるだろう。「国際化」という言葉が意識して使われているうちは国際化されていないと言える。極端に言えば大学では日本人学生と世界各国から来る留学生との違いを意識せずに同じ教育を行えるようになって初めて国際化が達成されたと言えるだろう。

ところで大学には教職員、学生などさまざまな関係者がいる。言うまでもないが学生の世代交代は早い上に新しい考えに自然に適応する能力も持っている。しかし教員、職員は社会の変化に対応する適応能力が退化している上に、学生に比べてはるかに長期間大学に勤務している。教職員のパフォーマンスが変わるためには世代交代に頼るのではなく、自分自身が変わらないといけない。そのため国際化を特に意識したFD活動に取り組まないと学生のニーズに対応できないであろう。また大学全体が変わるには講義だけが変われば良いというものではない。学生生活を支える様々なサポートのためには職員も一体となって国際化に対応したFD活動を行っていく必要があると考えられる。

今年は創立125年の節目の年である。これが一世代過ぎて150周年になった時に東洋大学はどう変わっているだろうか。150周年の際に大学の歴史を顧みたとき、今の国際化戦略とFD活動が成功であったと言われるように教職員が一丸となって努力したいものである。

平成23年度 一般教員FD研修会・第4回 授業改善シンポジウム

●プログラム

司会 堀口 文男(総合情報学部教授)

12:20-12:25	【開催挨拶】	学長 竹村 牧男 (文学部教授)
		「学生の精神衛生に関して大学教員として取り組めること」
	【講 演】	横山 富士男氏(埼玉医科大学 精神医学 准教授)
		埼玉医科大学病院 神経精神科・心療内科 副診療科長 児童青年精神医学担当)
13:25-13:40	【報 告】	「学生が望む授業改善、よい授業とは」
		東洋大学学生 FD 研究チーム
13:40-13:50	【休 憩】	
13:50-14:10	【事例発表】	「スマートフォンを利用した授業事例」
		ティモシ・ジェームス・ニューフィールズ(経済学部教授)
14:10-14:30	【事例発表】	「manaba を利用した授業事例」
		山崎 吉朗氏(日本私学教育研究所専任研究員・本学非常勤講師)
		「manaba を使ってできること
14:30-14:45	【報 告】	~これから使ってみたいと考えている先生方へ~」
		藤原 喜仁 (情報システム部情報システム課主任)
14:45-15:00	【質疑応答】	
15:00-15:10	【総括・閉会挨拶】	神田 雄一(FD推進センター長・副学長・理工学部教授)
15:20-16:00	【懇 談 会】	

日 時 平成23年11月26日(土) 12:20~15:10 場 所 研修会 白山キャンパス6号館 2階 6202教室 (懇談会 15:20~16:00) 懇談会 白山キャンパス6号館 16階 スカイホール

平成23年度 一般教員FD研修会開催報告

研修部会長 宮原 均

本年度も23年6月の新任教員研修に続 き、一般教員研修が同年11月26日に行 なわれ、埼玉医科大学病院の横山富士 男先生に「学生の精神衛生に関して大学 教員として取り組めること」と題してご 講演いただきました。このテーマを設 定した背景には、自殺者が年間3万人を 超える状況が継続しており、学生・生徒 の自殺者数も平成3年の482人を底に 年々増加傾向にあり、現在は倍増して いるということがあります。東洋大学 においても例外ではなく、一時は年間 二桁の自殺者を数えてしまうのではな いかと懸念されたことがありました。 更に、大学に入学したにもかかわらず、 大学生活になじめず引きこもりになっ てしまい、卒業できない結果に終わる 学生もそれほど稀ではなくなってきて います。

そこで、今回、学生の精神面に関し て「どのような兆候を、いかに発見し、 どう対応するか」を中心にお話しいただ きました。自殺の危険の高い学生、自 殺直前のサインについて具体的に説明 いただきましたが、特に、1人の自殺 が連鎖をもたらす群発自殺とその連鎖 を断ち切ることにもつながる、事後的 対応(情報伝達の方法等)の重要性につ いて触れられていました。更に、自殺 企図にもいたる自傷行為とその対処法、 例えば呼吸法など一般学生でも容易に 実践できる方法を紹介していただきま した。うつ病については、家族を含め た周囲の接し方及び服薬の方法の重要 性を認識することができました。

以上、たいへん有意義な内容でしたが、肝心なことはその実践です。各学部での積極的な取組が必要になります。

私が所属する法学部の例ですが、本年度から精神衛生委員会を設置し、先生方が授業等で少しでも疑問に感じた学生がいれば、この委員会に報告し、その情報を集積して対応策を考える仕組みを作りました。また、以前から行われている単位僅少者面接の目的の一つは、引きこもり学生の発見です。これによって、学生相談室との協力関係を具体的かつ緊密に行うことができるようになりました。

最後に、貴重な講演でしたが、出席 者が少なく残念でした。研修部会とし て、できるだけ多くの先生方に出席い ただくための方策を検討中であること を申し添えておきます。

第4回 授業改善事例シンポジウム開催報告

授業改善対策部会長 堀口 文男

授業改善については、FD活動の中でも最も重要な課題といえます。特に、部会では、授業改善事例を広く教職したでは、授業改善事例を広くしてが、改善の一助としてが、改善事例シンポジウムを事例シンポジウムでは、各学部にたがあるたります。今まを推薦いたでは、とは言えず、おました。しかし、あまり出席といるが、よした。しかし、あまり出席ではおりないとは言えず、部のの職論でもらった。

ティモシ・ジェームズ・ニューフィールズ教授

るスマートフォーンを活用した事例紹介が良いのではないかということになりました。さらに、ICTの授業への活用も加え、今回のテーマは「スマートフォーンを利用した授業事例」、「manabaを利用した授業事例」、「manabaを使ってできること」の3件の発表となりました。

「スマートフォーンを利用した授業事例」は、経済学部のティモシ・ジェームズ・ニューフィールズ先生より、ご自身の英語の授業での活用事例やスマートフォン活用の問題点と対処法について



グループ討議の様子

グループ討議を交え、活発な意見交換 が行われました。

次に「manabaを利用した授業事例」では、非常勤講師の山崎先生より、100人程度の多人数講義で manabaを使った効果的な授業の実施例についてご報告いただきました。最後に、情報システム部より藤原主任に「manabaを使ってできること」と題し、manabaの利用率が増加している現状とシステムの説明があり、今後さらに教員の意見を取り入れ、より良いものに改善していくことが述べられました。

参加教員からは、こういう事例は是 非、ビデオ配信して欲しいとの意見や、 大変参考になったとの意見が寄せられ ました。

当日の講演内容は、インターネットよりビデオ配信が行われておりますので、当日参加できなかった方は是非、ご覧になり、今後の授業の参考にしていただけたらと考えます。なお、パスワード保護されておりますので、FD推進センターまでお問い合わせください。

平成23年度 一般教員FD研修会・第4回授業改善シンポジウムを開催して

FD推進委員会委員長 神田 雄一

本年度は一般教員FD研修会と授業改善シンポジウムを合同で開催し、統一テーマを「学生の精神衛生とICTを利用した授業改善」と題して実施された。昨今、各キャンパスにおける学生相談の数が増加する傾向にある。仲間と引きなが増加する傾向にある。仲間と引き、動学の意欲が湧かない等々、もり、勉学の意欲が湧かない等々、教員は全ての学生の状況を把握している。教員は全ての学生の状況を把握してアが必要な学生とどのように向き合ったらよいのか戸惑うことも多い。

ICTを利用した授業改善は、多くの教員が関心を持っているテーマである。ニューフィールズ先生(経済学部)は、ご自身の携帯電話を利用しての模擬授業風の講演で新しい授業形態を示していただいた。携帯やスマホは授業からは敬遠されるメディアであるが、これだけ普及しているメディアを上手に利

用する工夫も大事なことであろう。山崎先生(本学非常勤講師)からは、具体的な機能の利用例の紹介もあり、これから利用を考えておられる先生方には大いに参考となった。また情報システム部藤原主任よりmanabaの具体的な使用法についても解説がなされ今後の活

用に弾みがつきそうである。

教員はどのように応えられるのであろ うか。我々に与えられた課題である。

本学においては教育の質の保証と向上の視点から、教員のみならず職員さらに学生をも含めたFD活動が展開されていることは大変喜ばしいことである。



学生FD研究チームによる発表

平成23年度 学部FD活動状況報告会

テーマ:学部・学科における教育の質保証のためのPDCAの取組事例

日 時:平成23年12月17日(土) 9:30~13:00

場 所:白山キャンパス6号館6202教室

10学部それぞれの活動その実態を明らかにすることにより、改善・改革のための知見・技能を共有することを目的として平成19年度より開催しております。

平成22年度からは、10学部からの発表を2年間のサイクルで実施することとし、昨年度は文・経営・社会・理工・生命科学部、今年度は経済・法・国際地域・ライフデザイン・総合情報学部がプレゼンテーションをしました。

報告会では、テーマ「教育の質保証のためのPDCA」について、具体的な改善方法や成果、課題などの発表にもとづき、いかに学生が主体的に学び、その成果を見出すことが出来るか、について議論しました。

はじめに、FD推進センター長の神田雄一副学長(理工学部教授)が開催趣旨を述べ、竹村牧男学長が「本テーマは自己点検・評価活動の一環でもあり、これまで以上の改善に結び付けることが必要である。大学の使命の一つである教育活動では、学士力を身に付けた学生を社会送り出すことが求められており、各学部における正課内外の諸活動を通して、学生ひとりひとりの成長を促してほしい。」と挨拶をしました。



竹村学長挨拶

続いて各学部のFD活動の報告がありました。

ライフデザイン学部の高橋儀平学部 長は、4回目を迎えた「学生との意見交 換会」および「卒業生アンケート」の事例 を紹介しました。

「学生との意見交換会」は平成23年度 春期は学生約40名、教職員約20名が参加 しました。開催時間は、授業に支障が無 く、なるべく多くの学生・教職員が参加 できるよう昼休み時間を使用していま す。学生からは、各回とも授業方法や語 学教育、授業に使用する施設・設備の整 備など、各専攻・学科の個別授業への要 望から始まり、次いで食堂、PC教室など の施設改善へと話題が進みます。機が熟 すと「学部の特色、理念を教える共通の 授業が少ないのではないか」といった、 学科・専門の垣根を越えた学生交流の必 要性などの意見が多く出されるように なりました。また履修者制限の理由、実 験室や工房の利用時間延長、実習指導の 教員差、実習で徴収される費用の使途に ついての情報開示も求められました。一 方教職員からは、教育の工夫、不十分な 施設への対応、教室管理、聴講態度の要 望が学生に伝えられました。これらの結 果は自己点検評価委員会と合同で開催 しているFD委員会で議論され、教授会 に報告されます。並行して事務課での対 応、各専攻・学科での対応、各教員の対応 という形で少しずつ改善が進められて います。



学生との意見交換会(ライフデザイン学部)

「卒業生アンケート」は学生の授業評価を測る手法として、平成22年度より学位授与式当日に実施しています。アンケートでは授業満足度は専攻、学科により差はあるもののおおむね授業評価は良好ですが、PC教室の改善、食堂(質、広さ)の環境整備、教室の空調、未使用キャンパス施設の活用、学科PRの工夫、就活や教職支援などへの課題が発見されました。

法学部の後藤武秀学部長は、不正行為の未然防止に有益な貸与六法試験の事例を紹介して、厳格な成績評価の重要性を強調しました。厳格な試験の実施が学生の学習意欲の喚起につながり、日常の授業に緊張感をもたらすとの教員共通の認識のもとに、貸与六法による試験を実施することとしました。実施科目について、学生並びに担当教員にアンケートを実施した結果、双方よりこの方式によ



貸与六法

の効果を報告し、今回試験を実施できなかった教員にも試験方法、授業展開の工夫等を共有しました。今後は法律系科目のすべてにおいて貸与六法による期末試験を実施するという方式を徹底し、継続するとともに、学生、担当教員に対するアンケートを継続し、効果の測定を行います。また、FD学習会において、本方式による試験の効果、特に日常の授業について検証し、教員間で認識を共有していきます。

次に国際地域学部の道畑美希講師は、 「英語講義の拡充、模擬講義の実施と相 互評価」「フィールド研修(海外・国内)、海外語学研修の充実と報告書の質の向上」「大使リレー講義の継続とproceeding の作成」「授業アンケート手法の検討と春秋学期年2回の実施」「卒論の内容チェックシステムの実施について」「英語コミュニケーション・ルームなど、国際化への取り組みとして行うユニークな活動を紹介しました。



イングリッシュ・コミュニケーション・ルーム (国際地域学部)

続いて経済学部の小川芳樹学部長は、 平成 17年度から開始した「教員総合評価」について報告しました。より良い教育・研究の実現を目指して、各教員がボトムアップで自発的に点検と改善を図っていくことを目的として、2010年度からは第2期の5年間が始まっていま

す。このサイクルは、各教員が①5年間 の教育・研究に関する中期計画を策定す る、②教育面で自分の担当科目の授業評 価アンケートなどを基に改善レポート を毎年提出し改善に務める、③研究面で 職分に応じて研究業績を積み上げる、④ 計画期間の半ばで中間報告を提出する、 ⑤計画期間の最後に中期計画の結果を 最終報告としてまとめる、というもので す。経済学部の基本的な考え方は、5年 間の中期計画の実施というPDCAサイ クルを繰り返しながら、教員各人が自発 的な「気づき」による教育・研究面の改善 に努め、全体のレベルアップにつなげる とともに競争力を高めるということが 目的です。5年一区切りを学部教員が一 丸となって改善に努めることで学部全 体の教育の質保証を着実に実現できる 仕組みです。

最後に、平成24年度初めて卒業生を輩出する総合情報学部の大場善次郎学部長は、「ユビキタス・コンピューティング・ネットワーク社会に求められる先導的情報システム人材を学部教育により

輩出しますので、就職の企業開拓や情報 提供などの協力をお願いします」と力を 込めました。

終わりに、神田センター長の総括とし て、「広範な FD活動が各学部・学科で展 開されてきている。独自の取り組みが発 展しており、FD推進センターとしても 過渡期から発展期へと進む段階にきて いると認識できた。PDCAサイクルに照 らし合わせると、CheckとActionが最も 難しいが必要である。授業アンケートの フィードバック手法について検討して いるFD推進委員会の部会でも、今日の 報告内容を参考にして開発していきた い」と抱負を述べ、「厳正な成績評価につ いても、シラバスに成績評価基準を明記 するとともにポートフォリオ等を通じ て開示することが重要である。また、大 学全体の課題として、学生のメンタルへ ルスへの対応が急務であることがわ かった。学生相談室と連携するととも に、早期発見・早期回復へと導くことが 出来るか、対応策を考えなければならな い」と締めくくりました。

平成23年度 公開授業を開催して

授業改善対策部会長 堀口 文男

公開授業は、全学の見本となる授業を参考にして、授業改善を図るために企画したものです。他大学でも行われており、本学でも昨年度より実施しております。今年度は、2つの授業科目を公開させていただきました。一つ目は昨年の授業改善シンポジウムにてご報告いただいた「エアロビクス指導法演習」について、ライフデザイン学部の鈴木智子先生にお願いしました。参観した授業の内容ですが、最初の30分が運動の動きの練習にあて、中間の30分が指導法の全体訓練にあて、最後の30分間が3人一組のグループでの指導法訓練となっています。無駄なく効率的に指導法がマスターで

きる工夫がされていたり、上達者3人による実演を取り入れるなど、皆のレベルアップとなる工夫も取り入れていらっしゃいました。50人近くの学生が一斉にエアロビクスする様は圧巻であり、おしゃべりしたり、ふざける者もいなく、すばらしい授業だと感心しました。

二つ目は、今年度、他大学より東洋大学に移られた経済学部の竹中佐英子先生にお願いしました。科目は「中国語演習 I (総合) B」という語学の授業です。あらかじめ、参観者のために、授業の流れや、授業のやり方に関する説明資料を用意してくださっていました。学生が授業に参加せざるを得ないように、常にノー

トをとったり、音読したりと最後の小テストを解くために、必要な知識を何度も、大量に練習させます。また、優秀な学生を褒めたり、賞品をあげたりなどの工夫も行なっています。参加した先生からは、講義内容は大変わかりやすく、とても素晴らしい授業であったとの感想をいただいています。

今年度の公開授業は2つの講義に 絞って開催しましたが、各学部内でのよ い授業を行なっている先生方のやり方 を参考にすることも重要です。皆様方 が、さらなる授業改善を行えるように、 学部ごとの授業参観が活性化すること を期待しています。

FDハンドブック(改訂版)の刊行によせて

編集部会長 幸田浩文(経営学部)

編集部会では、平成21年3月に『FDハンドブック』(初版)を発刊してから、およそ3年近く経過しました。そこで新たな項目を加え、この度改訂版の刊行



. . .

ともに、主な項目として、基本編の「TAをどう使う?」では TAに位置づけとTAハンドブックの紹介、「単位僅少者の把握」では取組事例、「障がい者への配慮」では心の悩み・発達障がいのある学生への配慮、その他「ハラスメントとその防止」などが加わりました。

また実践編では、各学部での様々な授業形態の実践例を掲載しました。最後の資料編の「関連図書一覧」「FD用語集」「FD関連リンク集」には、初版より現在までの新たな情報を付け加えました。本ハンドブックには、皆様の授業・校務に役立つヒント・実例が数多く盛り

込まれています。ご活用頂けましたら 幸いです。

3部構成

「基本編」…シラバスの作成から学生の成績評価まで、基本事項の確認、注意点などについて再確認できます。

「実践編」…第2~4回授業改善事例シ ンポジウムで発表された実 践例を、学生の感想なども 交えて紹介しています。

「資料編」…FD活動に関する情報収集などに役立ちます。

『東洋大学FD推進センター活動報告書(平成21-22年度)』を刊行しました

全学 FD推進センターの活動および各学部・研究科における FD活動についてまとめました。

目次

平成22年度学部FD活動状況報告書 平成22年度大学院FD活動状況報告書 平成21-22年度FD推進センター活動報告 関係資料(規程、刊行物)

FD推進センターのホームページよりダウンロード可能ですので、ご活用ください。 URL: http://www.tovo.ac.ip/fd/publications i.html



各学部・研究科におけるFD活動

社会学部FD研修会「協同学習の魅力とその組織的取り組み」を実施して

社会学部教務課 課長補佐 深澤 博

文部科学省が「学士力」、経済産業省が「社会人基礎力」を打ち出してから入しく、大学教育も時代の流れとともに大きな変化を迫られてきていると感じております。

伝統的な教授法は、学生にたくさんの知識を教える、詰め込むというもので、一方向の知識の移動が授業の中心でした。それに対し現在は、学生が学習目標を達成するだけにとどまらず、仲間と一緒に働く意欲と、チーム内で協調的に仕事ができる技能など、多くの期待と要求が大学教育に求められています。

社会学部FD推進委員会は、大人数授業・少人数授業に関わることなく、前述の学びの方法論を実践展開する創価大学教育学部関田教授(教育・学習活動支援センター長)を講師に迎え、「協同学習の魅力とその組織的取り組み」と題し、10月3日にFD研修会を実施しました。

講師は、日頃、学生が受講する雰囲気を感じ取ってもらいたい旨の説明ののち、いくつかのテーマを設定、続いて4~5名程度のグループに分かれ、意見や感想を交差させる形式を行いました。他学部の先生方にもご出席いただき、真剣な討論や笑いありの、座学型の研修会では味わえない実践的なものでした。

最後に、参加された先生方のアンケート(意見感想)をご紹介して、報告といたします。

- ・協同学習は、グループ内で、テーマとして与えられた話題以外の会話を始めてしまうことも起こるので、そうしたことが生じないようにする工夫などを、具体的に知りたいと思った。
- ワークショップなど、参加型学習の必要性は感じており、導入している。グループディスカッション

やワークショップとの違いを、明確に示していただけると、尚良かった。

- ・大人数授業のグループ学習の事例 紹介が、とても興味深かった。文 学部FD委員です。
- ・考え方自体が大変興味深いものだっ たので、具体的な実例が聞きたく 思いました。
- ・発達障害の学生に対する、協同学 習の在り方を聴きたかった。
- ・協同学習に関するより具体的な教 員の関わりについて知りたかった。
- ・大学教育のゴールを、会社で役立 つ能力の育成に抵抗なく設定して いることに驚いた。
- ・教養教育と協同学習を2項対立化するつもりは全くないが、社会学のスタート地点とずいぶん違うと感じた。ゼミでは、充分、協同学習はできていると思う。

第1回FD講演会「内部質保証とは何か?―PDCAサイクルの構築―」

今回の文学部のFD講演会は、初めて学外からの専門家生和秀敏氏(大学基準協会・広島大学名誉教授)を招いての開催でした。自己点検・評価活動の一環としてFDをどのように考え、どのように実践していくのか、ここからスタートすることだろうと思います。その第1回のテーマは、新たな大学評価の理念として求められている、教育の「内部質保証」とは何かということです。

生和氏は日本の大学の大綱化という 歴史的背景や欧米の大学との制度的な 違いを踏まえ、私たちが「研究の自由度」 を保全しつつ、「教育の公共性」を社会に 対して自己説明し保証していくために こそ、内部質保証システム(PDCAサイ クル)の確立は不可欠なものであること を丁寧に且つ熱く語ってくださいまし た。大学教員職についた頃の、身の引

き締まるような思いを新にしました。 ユニバーサル・アクセス化した今の日本 の大学では、「教育理念」を明確にしてそ れを実践し、さらには自己点検・評価す るというところまではある程度実現さ れていますが、問題は点検評価の結果 をどのように「改善 |に結び付けていく かという点であると氏は述べられてい ました。同感です。そのためにも、学 生の授業評価や教員の自己評価を踏ま えて、教員個人だけではなく学部・学科 レベルで絶えず自らの教育の「目標」と 「価値」を明確にして、その実現のため の「目的化された改善」を実行していか なければならないことを痛感しました。 むろん、システムが構築されればよい というわけではなく、これまで実施し てきたことをより徹底するのは当然の こと、今後は学生の授業ポートフォリ

オや教員の授業改善計画書など、さら に踏み込んだ行動によってシステムの 構築とともに実効性ある運用も求めら れると思います。

「自律した自己成長する大学」こそ国際的なスタンダードとしての《大学》というものであり、我々はそれを目指さねばならないと氏が強調されていた言葉が胸に響きます。



石田委員長

第2回FD講演会「GPA制度と大学教育の質保証」

今年度2回目の文学部FD講演会は GPA制度についての話。講師の圓月勝 博氏は同志社大学で2004年度に GPAを 導入した際のFD委員長であり、この制 度導入の狙いやその後の運用について、 実例を示して丁寧にお話し下さった。 我々の関心の一つは、何故に GPA導入 なのかということにありましたが、そ れについては「グローバル化への対応と いうことしかない」と明確なお答え。英 米文学科、英語コミュニケーション学 科を抱え、国際交流に力を入れたいと 思っている文学部にとっては、留学生 を送り出すためのグローバルスタン ダードであるGPAの導入は必須である ということを痛感しました。また導入 しても、我々の成績評価基準が変わる わけではないのだから、それなら少し



圓月勝博氏(同志社大学)

でも学生にメリットのある制度を導入 することに何ら問題はないとも思えま した。

第二の関心は「GPAを導入して、学生 が容易に高評価をくれる科目に流れる のではないか」ということでした。「そ ういうということはなかった。多くの 学生は、むしろこれまで以上に真剣に シラバスを読み、授業に取り組んでい る。」とのお答えには勇気づけられた気 がします。また、同志社大では成績評 価公開制度も導入し、80%の授業科目 の科目ごとの成績分布を公開している そうです。こうした運用によって、教 員も自分の成績評価の在り方に自信を 持って臨んでいるという効果が生まれ ていると聞き、学生・教員の相互に高い 効果が得られていることを羨ましくさ え思いました。

あとは、我々がGPAをどう東洋大学 として使うかを、しっかりと議論して いくことが大切であると痛感します。

講演後のアンケートでは、出席教員の75%が講演でGPAへの理解が深まったと回答してくれました。他学部の教員や職員の方々もご参加くださったことに、この場を借りて感謝申し上げます。

GPA制度とは

授業科目ごとの成績評価を、例えば5段階(A、B、C、D、E)で評価し、それぞれに対して、4・3・2・1・0のようにグレード・ポイントを付与し、この単位あたりの平均を出して、その一定水準を卒業等の要件とする制度。

抜粋: 大学における教育内容等の改革状況 について(文部科学省高等教育局大学振興 課大学改革推進室)

経済学部におけるFD活動-FD視察、FD講演会を実施して

2011年度経済学部FD委員長 曽田 長人

経済学部では2005年度より全教員から参加を募り、FD視察およびFD講演会を、ほぼ毎年それぞれ1回~2回、実施している。実施の目的は、大学教育の自己理解およびそれを取り巻く状況が大きく変化しつつある中で、現在の経済学部の教育を見直すきっかけ、今後の教育改善への刺激を得る点にある。実際に過去の視察、講演を通して、FD先進大学における組織としての教育改善への取り組み、FDと関連する諸分野の詳しい状況について多くの知見が得られてきた。

2011年度は2回、学外への視察を企画・実施した。

第1回目として9月に同志社大学教育 開発センターへ、学部内外の教職員8 名の参加によるFD視察を行った。事前 に東洋大学側からの先方へ質問事項を お知らせし、それに対する回答を得る 形で質疑応答が行われた。授業評価アンケート、学生生活調査、成績評価(GPA)、初年次教育等について興味深い話を伺うことができた。感銘を受けたのは、同大学において様々なFD活動を有機的に関連付ける制度設計が行われている点である。つまりGPAの運用、授業評価アンケート、授業講評の三者がサイクルをなし、学生生活調査の結果を初年次教育の改善へ活かすこと等が試みられている。

第2回目としては2月に国際教養大学へ、学部教員9名の参加による視察を行った。同大学は原則として英語による授業、少人数教育、寮での外国人留学生との共同生活、1年間の海外留学の義務化など先駆的な試みを行い、いわゆるグローバル人材の育成を目指している。事務局との質疑応答、学内の施設見学を行い、現学長の強力なイ

ニシアティブの下に、同大学がコミュニケーション力としての教養教育、異文化および日本文化の理解に力を入れていること等を知ることができた。図書館を24時間、開館する等、勉強に集中できる環境づくりを行っている点も印象的であった

11月には愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の山田剛史准教授を講師として「学生調査とFDの連環による教育の質保証・向上」というテーマでFD講演が行われた(学部教職員21名の参加)。この講演ではFDとの関連における学生調査の利点・欠点、調査結果の分析・解釈の方法等が紹介され、啓発される内容であった。

FD視察、FD講演会の今後の課題としては、参加人数の確保、視察や講演で得た知見を具体的にいかに活かしてゆくかという2点が挙げられるであろう。

◆FD講演会 「学生生活調査とFDの関連」

日 時:平成23年11月24日 15:00~16:30 参加者:21名(教員:20名、職員:1名)

愛媛大学の山田剛史先生を講師にお迎えして、FD研修会「学生調査とFDの連環による教育の質保証・向上」を行いました。 実証的なデータを基にした、わかりやすい、包括的な説明で、一同たいへん啓発されました。愛媛大学によるFDとの様々な取り組みも知ることができ、有益でした。FD活動の全体を振り返り、これからの本学(部)のFD活動を模索する、よい機会となりました。講師の山田先生に深く感謝を申し上げます。

<アンケート結果> 回答者: 21名

◎研修についての満足度 満足: 52% どちらかといえば満足: 38%

◎講師についての満足度 満足: 47% どちらかといえば満足: 47%

◎受講して良かった点

- ・大学ごとのFDポリシーの違いや取り組み 方等、普段聞けない貴重な情報を得られた。 素人にもわかりやすく講演された
- ・自分が所属している組織(学部)や個人で の活動が頭の中にあったが、他大学や高 校との連絡が必要であると感じた。
- ・「学生パネル調査」など、統計的に興味深い 事柄についても説明があった点。学生正課 外ポイントについてもおもしろかった



山田講師 **愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室・** 教職員能力開発拠点

- ・具体的データに基づく報告であり、説得力 があった。
- ・大学の取り組みがよく理解できた。本学も 見習うべき点が多くあった。

川越キャンパス 教職員FD研修会を開催して

理工学部機械工学科 松元 明弘

平成24年2月22日に川越キャンパスにて理工学部・総合情報学部共催によるFD研修会が開かれた。テーマは多くの教員に関わりがある内容として「ToyoNet-ACEを活用した授業改善事例」とし、今回は、理工学部生体医工学科(数学)の小山信也先生から ToyoNet-



小山教授

ACEの数学教育への適用事例を紹介して頂き、同時に、インフラの提供側として情報システム課の藤原喜仁氏からToyoNet-ACE(manabaコース)の使い方と共にその他の教育支援システムの概要について説明頂いた。この研修会の内容を簡潔に報告する。

小山先生の講演では、学生の出席を促し、講義室では前に座らせ、授業に積極的に参加させるために、ToyoNet-ACEという「ツール」を使うという考えが示された。講演内容はツールの利用例の紹介だけにとどまらず、教育論やインフラ整備などの問題提起もあった。この限られた分量ではこの講義の素晴

らしさを伝えきれない。多くの教職員に参考になるものである。後日白山キャンパスにても同内容を紹介してもらう 予定であるので、その際はぜひ聴講することをお勧めする。

一方、情報システム課の藤原さんには、ToyoNet-ACEが現在のmanabaコースにシステム更新されて使い勝手がだいぶ上がったこと、ファイルサイズを50MB以下に抑えればシステムとしては何個でもアップできること、数百人の同時アクセスにも耐える設計となっていることなどが簡潔に紹介され、次回は実習を含んだ研修をすることが提案された。

FD講演会「大学生に対する学習支援~精神医学的視点からの示唆~」

本学ライフデザイン学部の白石弘巳教授を講師に迎え、平成23年10月19日にライフデザイン学部において、 平成23年12月9日には生命科学部において FD講演会を開催した。

大学生に対する学習支援ー精神医学的視点からの示唆一

ライフデザイン学部生活支援学科 教授 白石 弘巳

今日の日本では、学習に支障のある 大学生が増えているといわれている。 現在日本が批准に向けて国内法の見直 しを行っている障害者権利条約には、 障害を持つ人に対して「合理的配慮」を 行うことが義務づけられている。それ は配慮を行う者に「不釣り合いな又は過 重な負担」を強いるものではないが、精 神障害をはじめ障害を理由とする不作 為の排除はもはや許容されない。こう した障害者権利条約の理念を先取りし、 大学においても障害学生支援体制を整 えていくことが求められている。少し 前、知り合いの高校教諭から発達障害 の学生が東洋大学のある学部に入学し たが、一部学習に支障が出ることが予 想されるので支援を依頼したいという 電話を受けた。担当の方々のご尽力の 結果、1年後教諭から感謝の言葉をい ただいた。このような個別支援は、教員、 事務職員や学生相談室、医務室などに より、すでに多数行われていると思わ れるが、発達障害をはじめとする精神

障害により学校生活に支障が生じても、本人も含め、周囲がそれと気づかない場合、また本人が積極的に支援を求めて来ない場合、教員が対応に迷う場合、など課題も少なくない。

教員は、学習に支援を要する学生の 中に、発達障害の他、統合失調症、う つ病、摂食障害、パニック障害、境界 型パーソナリティ障害などさまざまな 精神障害をもつ者がいる可能性を念頭 において対応することを求められる。 一口に精神障害といっても診断によっ て、症状も違えば、治療や対応も同じ ではない。もちろん、一般的に専門知 識や技術のない教員が、診断や治療を 行えるものではなく、教育者として教 員は、精神に障害をもつ学生の状況に 応じて、それぞれの学部の設定してい るディプロマポリシーの達成に向け、 一部個別的な指導を、時には継続的に 行っていくことが想定される。一人で 対応することが困難と感じられる場合 には、医務室や学生相談室などに学生 を紹介したり、自ら対応などを相談したり、あるいは学外の機関と役割分担 を明確にしたりしながら、対応に当た ることが望まれる。

障害の有無にかかわらず、古今東西学生時代はアイデンティティの確立に向けて悩みや混乱がつきない時期でもある。特に現代のような時代には、学生自身が精神の健康に配慮する必要性を認識するための科目(「大学生の精神保健」など)を一般教養的科目として用意することも予防という意味で効果的かもしれない。



白石教授

朝霞キャンパス開催報告

FD推進委員会委員 嶋﨑 博嗣

10月19日(水)、ライフデザイン学部においてFD講演会を実施した。精神科医でもある白石教授は、精神疾患の分類を始め、各病態の特徴及び対応について、具体的事例を交えながら概説された。また、精神疾患を抱える学生に対する「大学の対応」についても6つの課題を提起された。

約40名の参加者は、近年の学生の動

向と突き合わせながら興味深く、熱心に聴き入る姿が印象的であった。開催時間の都合上、講演後1名の教員のみの質問となった。その質問とは、どのように精神疾患を抱える学生と他の学生を共存させて授業運営を行い、成績評価を行うかという内容であった。質問に対する回答として、精神疾患を抱える学生の学習権の保障と他の学生への

説明責任を視野に入れ、状況を的確に 把握しつつ、それぞれ丁寧に対応する (話し合っていく)ことの重要性が語ら れた。難しい課題である。

講演会終了後、意見交換の懇親会が 行われた。その席上で、上記問題の難 しさが参加者で対話され、教職員間で 情報を共有し合うことの重要性が話題 となっていた。

板倉キャンパス開催報告

FD推進委員会委員 川口 英夫

12月9日(金)には板倉キャンパスにてご講演いただいた。メンタルヘルスに関する基本的な知識や重要な観点を整理してご提示いただき、大変勉強になった。教職員の対応に当たっては、『ゲートキーパー』であるとの認識が重要であるとのご指摘が印象に残った。一人で抱え込むのではなく、どう専門家に繋いで行くのか、それぞれの立場や状況に応じて心構

えを持つことが最も現実的な対応である、とのご指摘である。

注目すべきは講演後の質問タイムである。予定を大幅に超過して30分間ほど質問が続いた。多くの質問が、実際に現場で対応に苦慮している問題について白石先生にアドバイスをお願い申し上げるものであり、メンタルヘルス問題の広がりと複雑さが反映されていると思われた。

白石先生は一つ一つの質問に具体的かつ 丁寧に解説して下さり、質問者も大変心 強く感じたであろう。白石先生もおっ しゃっていたが、個々の事例に正解はな く、ベターな対応を積み重ねるしかない のが現実と考えられる。対応に迷った時 にお伺いできる先生が身近にいらっしゃ ることで、対応者のメンタルヘルス状況 も大いに改善できると感じた。

学生FD活動・他大学との交流

学生FD研究チーム・関東圏FD学生連絡会の活動

曾根 健吾(文学部教育学科3年) 原田 鈴彦(文学部教育学科2年)

本学で学生FD活動がスタートして、 平成23年度で2年目を迎えた。学生 FD 研究チームでは本年度「交流会(しゃべ り場)」の開催やニュースレターの発行 などの取り組みをしている。交流会 (しゃべり場) は本年度3回開催し、学 生と教職員の方々が「なぜ学生は教室の 後ろに座りたがるのか」「就職活動のた めに大学はあるのか」「こんな授業がお もしろい! | などのテーマについて熱い 議論を交わした。またしゃべり場など で出た学生の声を生かして、「授業改善 事例シンポジウム | (2011年11月26日開



交流会(しゃべり場)の様子

催)にて「学生がのぞむ授業向上とは」 というテーマで発表を行った。学生FD 研究チームの取り組みで得られた学生 側からの声や思いを、教職員の方々に 発信していくことがこの活動において 重要であり、今後も積極的に発信して いく予定である。

今年度から新たに、シラバスにはな い先生の声を学生に発信し、学生の授 業に対する興味・関心を高めていくとい う目的のもと「先生インタビュー~駅伝 リレー~」を始めた。その他に来年度に 向けて「学生の声コンクール | 「ゲスト を招いて学びを深めるイベント」など新 しい取り組みの企画・準備にもあたって

一方学外において、法政・立教・青山 学院・東洋の4大学で学生FDスタッフを 募り、関東圏の大学で学生によるFD活 動の活性化を目的とする「関東圏 FD学 生連絡会 | が2011年8月に発足した。各 大学の学生FDスタッフが、授業向上・ 広報・学生生活・学生FDイベントの各

ワーキンググループに分かれて刊行物 の発行や学生からできる授業向上、イ ベントの開催等の取り組みを企画して いる。

チームメンバーからは、「学生FD活 動に参加して、学内外で交流を深め広 げていくことで新たな発見や気づきが ある」という声が挙がっている。チーム メンバーの不足などの課題があるが、 学生目線に立った教育活動が本学でさ らに展開されるよう力を尽くしていき たい。



他大学との交流「関東圏FD連絡会」

平成21年度より青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学のFD担当者が集まり、同規模の私立大学が抱える FD活動の問題解決と情報収集を目的とした意見交換会を開催しております。今年度より新たに学生FDスタッフも 各大学から集まり、学生も交えたFD活動を推進しています。

第7回

日 時:2011年9月28日(水) 16:00~17:30

場 所:法政大学 市ヶ谷キャンパス

ボアソナード・タワー25階 C会議室

参加者:青山学院大学、法政大学、立教大学、 東洋大学のFD担当者 計14名

概 要:①各大学におけるFD活動状況報告

②「関東圏FD学生連絡会キックオフ ミーティング」について

③「関東圏FD学生連絡会」の運営について

④ 第18回大学教育研究フォーラムラウンド テーブル企画について

⑤ GPA制度について (情報交換)

第8回

日 時:2012年1月25日(水) 16:00~17:30

場 所:東洋大学 白山キャンパス 2号館16階スカイホール

参加者:青山学院大学、法政大学、立教大学、 東洋大学のFD担当者 計16名

概 要:①各大学におけるFD活動状況報告

② 「学生FDNEXT1~集まろう! 繋がる点と 広がる輪」の開催について

③ 各大学における学生の成績評価指標 「GPA制度 | の取り扱いについて

学外FD関連研修会参加レポート

「愛媛大学SPODフォーラム」に参加して

経済学部経済学科 教授 吉田 明子

SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)は、四国地区の高等教育機関すべてが加盟するネットワークである。SPODフォーラムは毎年8月の終わりに開催されるフォーラムで、加盟大学が中心であるが、非加盟大学の教職員も受け入れている。以前から愛媛大学のFDに注目していたため、2010年・2011年と連続して参加した。

今回は、4日間(8月23日~26日)の日程で40講座が開講された。講師はほとんど加盟校の教員である。参加者はプログラムの中から事前に参加講座を選び、Webで申し込む。各講座はほとんどが定員30名から40名で、2時間、講義とグループワーク等で「アクティブ」に

学ぶ内容で構成されている。FDだけでなくSDの講座が多いことも特徴である。 (具体的にはhttp://www.spod.ehime-u.ac.jp/pdf/2011_forum_report.pdfを参照)

私が今回参加した講座名は以下の通りである。

- 1) 小グループ・ペア学習を取り入れた 授業デザイン(侯野秀典先生)
- 2) 学習成果をどう測定し、活用する か?(山田剛史先生)
- 3) アクティブ・ラーニングで授業改善 (立川明先生)
- 4)シンポジウム: 高等教育機関におけるマネジメント―危機管理と情報開示の意義―

5) ラウンドテーブル

テーマ: 授業改善(山田剛史先生)

6) 大人数講義の基本(小林直人先生)

個人的には「ゼミの活性化」および「大人数講義での学びの深め方」という2つの課題をもっていたが、どの講座も非常に実践的な内容であり、実際に講義やゼミで使える様々なノウハウやヒントが得られた。些細な質問にも丁寧に答えていただき、感謝している。

愛媛という土地柄か、率直で温かな 雰囲気で、本当に楽しく有益なフォー ラムだった。

講義やゼミの運営で何か具体的に解 決したい課題がある場合に、特におス スメのフォーラムである。

「関西国際大学GPフォーラム」に参加して

フォーラムは「教授過程・学習過程の 構造化と学習成果~学習支援型IRと科目クラスター化の成果と可能性~」と 題して、濱名(関西国際大学学長)氏は 教育改革を振り返り、建学の精神「以受 為園」から3教育目標、5学習ベンチマークを教育方針とし、大学・学部・学 科のポリシーとして構造化した。カリキュラムポリシーとして、1)教育内容の構造化、2)教育方法として①アクティブラーニング、②体験と学習の往還、③クラスター(科目間連携)化によ る学習効果の促進、3)教育評価法として①ルーブリックの導入、②リフレクション・デイを設定した。榎本(文科省高等教育局長)氏は、詳細な資料を基に、大学進学率は上昇傾向だったが、今後は?教育活動や改革が組織的な見した教育内容・方法の充実に加え、そのでしたが、特色ある教育をどう社会にアピールするか? キャリアガイダンスの義務化ではなく、学内の組織的基展開になっているかが補助の判断基

社会学部社会心理学科教授 杉山 憲司

準? 川島(神戸大学教授)氏は、パネルディスカッションで、改革の成果は一向に上がっていないのでは? その理由として、改革の主人公は学生であり、FDでもSDでもない。教育から学習への高等教育のパラダイムシフトが不可欠と主張。森(島根大学准教授)氏は、S大学を例に、不本意入学が6割を占め、出だしでつまずく理工系学科での、正課外メンターによる改善事例について報告した。

立教大学シンポジウム「学位取得へ導く大学院教育のあり方-博士後期課程を中心として」

学長事務課 主任 渥美 元康

関心を持っていた「大学院FD」に関するシンポジウムということで、平成23年10月25日のシンポジウムに出席した。2件の講演が行われたが、私は特に、名古屋大学の高等教育研究センターの近田政博准教授の講演内容に興味を持った。

近田氏は、大学院教育の中心をなす研究指導について、「研究指導はなぜ難しいのか」というテーマで、名古屋大学の教員調査から得られた知見を踏まえて講演を行った。まず、これまで日本の大学で、研究指導のFDが取り上げられてこなかった理由として、「個別化すぎてノウハウ化できない」「そこまで大学当局に干渉されたくない」という回答

が多い一方で、各教員の間では、「学生の基礎学力やメンタルの問題」「就職先と成果主義の問題」等、研究指導に関する悩みが共通しているという実態を説明された。

一方で、講義科目と異なり、多くの教員にとって研究指導の方法は、「自分」と「自分の指導教員」の2種類のノウハウしか有していないのが現状であり、効果的な研究指導方法の共有は、実は教員にとって「研究指導に費やす時間の合理化」「教員が抱えている研究指導上の問題・悩み・ストレスの軽減」となり得る可能性を指摘された。

その上で、メルボルン大学教育研究 センターが発行し、近田氏が翻訳して いる『研究指導を成功させる方法~学位論文の作成をどう支援するか~』を紹介し、それらの事例を踏まえながら、「研究指導の現状に関する危機意識、および研究指導を成功に導くための基本メッセージ・目標は、学問分野を問わず、共通点が多いのではないか」「学問分野ごと、研究室ごとの個別的・具体的な指導ノウハウを集積することは可能」「研究指導のガイドライン、事例集、ガイドブックを作成することにより、一定の効果を期待できる」という3点の仮説を提示されており、非常に興味深い講演であった。

平成23年度 東洋大学FD推進センター活動報告

(平成23年9月~平成24年3月)

FD推進委員会

- ◆ 第 4 回
- 日 時: 平成23年10月15日(土)10:00~12:00
 - 報告1 各部会活動状況報告
 - 報告2 各学部・研究科・大学院における2010年度秋学期FD活動状況報告
 - 報告3 センター長報告 ①学生の成績評価 [GPA] 制度の導入について
 - ②第7回関東圏FD連絡会について
 - ③学生FD研究チームの活動について
 - 審議1 平成23年度一般教員FD研修会・第4回授業改善事例シンポジウムの 開催について
 - 審議2 授業フィードバックアンケートの全学共通項目(案)について
 - 審議3 平成23年度学部FD活動状況報告会の開催について
- ◆第5回
- 日 時: 平成24年1月21日(土) 10:00~12:00
 - 報告 1 各部会活動状況報告
 - 報告2 センター長報告 ①学生の成績指標の全学的な導入について
 - ②学生FD研究チームの活動について
 - ③第8回関東圏FD連絡会について
 - 審議1 全学共通の授業フィードバックアンケートについて
- ◆第6回
- ▶日 時: 平成23年3月17日(土)10:00~12:00
 - 報告 1 各部会活動状況報告
 - **報告 2** センター長報告 ①学生の成績指標の全学的な導入について
 - ②本学の学生FD活動状況について
 - 審議 1 平成24年度ティーチング・アシスタントFD研修会の開催について 協議1 平成23年度FD推進センターFD推進委員会の活動報告と課題の抽出
 - および平成24年度FD推進センターの活動計画(案)について
- 協議2 全学共通の授業フィードバックアンケートのスケジュール変更について

学内公開活動

平成23年度公開授業

「エアロビクス指導法演習」

- ●講 師:鈴木 智子 (ライフデザイン学部健康スポーツ学科講師)
- ●開催日時:平成23年10月21・28日(土)、11月11日(金)3限
- 場:朝霞キャンパス 体育館2階剣道場
- 参加対象:本学専任教員及び非常勤講師
- ●参加人数:3名

「中国語演習 I (総合)B」の「1コース」

- ●講 師:竹中 佐英子(経済学部国際経済学科准教授)
- ●開催日時:平成23年12月16日(金) 4限
- 会 場:白山キャンパス1号館3階1310教室
- 参加対象:本学専任教員及び非常勤講師
- ●参加人数:5名

平成23年度一般教員FD研修会・第4回授業改善事例シンポジウム

- ●開催日時:平成23年11月26日(土) 12:20~16:00
- 場:白山キャンパス6号館6202教室
- ●参加対象:本学教職員
- ●参加人数:50名

平成23年度学部FD活動状況報告会

- ●開催日時:平成23年12月17日(日)9:30~14:00
- 場:白山キャンパス6202教室
- 参加対象:本学教職員
- 参加人数:約80名

部会長会議

- ◆第2回
- 日 時: 平成24年1月11日(水) 18:10~19:30
 - 議題1 各部会の活動報告
 - 議題2 GPA制度の導入について
 - 議題3 授業フィードバックアンケートについて
 - (議題4) 平成24年度FD推進センター活動計画について

研修部会

- ◆第2回
- 日 時: 平成24年3月3日(土) 13:00~14:00
- 議題1 平成23年度研修部会の活動報告について
- 議題2 平成24年度TA研修会の開催について

大学院部会

- ◆第2回(メール会議)
- 日 時: 平成24年1月24日(火)~2月10日(金)
 - 議題1 平成23年度大学院部会の活動報告について

授業改善対策部会

- ◆第2回(メール会議)
- 日 時: 平成24年2月27日(月)~3月10日(土)
 - 議題 1 平成23年度授業改善対策部会の活動報告について
 - 議題2 平成24年度授業改善対策部会の活動計画について

授業評価手法検討部会

- ◆第3回
- 日 時: 平成23年10月8日(土) 10:00~11:30
- 審議1 全学共通の授業アンケートについて
- 審議2 全学共通の授業アンケートフィードバックシステムの開発について
- ◆第4回
- 日 時: 平成23年10月29日(土) 10:00~12:00
- 審議 1 授業フィードバックアンケートシステム導入にあたっての付帯事項 の検討 (室)
- ◆第5回(メール会議)
- 日 時: 平成24年1月11日(水)~1月16日(月)
 - 審議1 授業フィードバックアンケートシステムの付帯事項の修正案について

編集部会

- ◆第3回(メール会議)
- ●日 時:平成23年10月28日(金)~11月9日(水)
- 議題1 FDハンドブック (改訂版) について

平成24年度

東洋大学FD推進センター活動計画 (平成24年4月~平成24年8月)

学内公開活動

平成24年度ティーチング・アシスタント FD研修会

- ●開催日: 平成24年4月14日(十)
- ●会 場:白山キャンパス(教室未定)
- 平成24年度新任教員 F D研修会
- ●開催日:平成24年6月
- ●会場:白山キャンパス6号館(教室未定)



東洋大学FDニュース 第9号

-発 行:東洋大学FD推進センター 発行日:平成24年3月17日 〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20 TEL 03-3945-7253 FAX 03-3945-7238 e-mail:mlfdshien@toyo.jp

http://www.toyo.ac.jp/fd/index_j.html





東洋大学は平成19年度に(財)大学基 準協会による大学評価 (認証評価)を受 け、「大学基準に適合している」と認定を 受けました。

この認定マークは、大学が常に自己点 検・評価に取り組んでいること、そして社 会に対して大学の質を保証していること のシンボルとなるものです。